

62. 「丙午」の年、再起の刻

医事万華鏡

かつて世界を席巻した日本発の科学研究は、いま静かな岐路に立っています。半導体やA.I.、バイオ、エネルギーといった最先端分野において、日本は国際競争力に遅れをとっていると語られることが増えました。研究や技術の種は確かに存在するにもかかわらず、それがイノベーションとして結実し、社会や産業を動かす力へと転化しきれていないのが現状です。この停滞の正体こそが、私たちが真正面から向き合い、打開すべき課題と言えるでしょう。

しかし、日本における科学の在り方全てが問題と断じるのは早計です。長い時間軸の中で基礎を積み重ね、ノーベル生理学・医学賞（2025年）という世界的評価に至った坂口志文氏の歩みは、そのことを証明しています。派手な成果を急がず、流行に迎合せず、それでも探究をやめなかつた姿勢は、日本人の研究文化が本来持つ粘り強さと誠実さを象徴しています。ただ同時に、そのような成功が「希少な例」として語られるようになった現実は、次世代の芽

が育ちにくい土壌を示唆してもいます。この状況は、しばしば「丙午」の時代になぞらえられます。迷信という目に見えない力によつて出生が控えられ、可能性そのものが語られぬまま時を過ごした年。しかし丙午は、単なる忌避の象徴ではありません。そこには、『ポジティブな動機はポジティブな結果を導く』というジンクスが重ね合わされました。困難な運命を承知の上で選び取られた意志は、むしろ強靭さと独自性を備え、後の時代に新たな価値をもたらす——そんな逆説的な希望が、丙午には宿つてゐるのです。

日本の科学技術も、いままさにその地点にあります。失敗を恐れ、前例に縛られ、挑戦を先送りしてきた時間は確かに長かつたかもしません。しかしだからこそ、これからの一歩は「選び取られた挑戦」となり得るのです。研究者に自由な時間と裁量を与え、若い才能に長期的視野で投資し、失敗を次の「知」へと変換できる制度を整えること。そのすべては、未来を信じるというポジティブな動機に根ざしていきます。

科学技術立国・日本の地位を取り戻すということは、過去の栄光をなぞることではありません。不確実性を受け、意志をもつて未来を選び取ることです。丙午の年に生まれた命がやがて社会を支える力となつたように、いま時かれる挑戦の種は、必ず次の時代の実りとなります。

静かな覚悟と確かな希望を胸に、日本発の科学技術は再び世界へと歩み出します。その始まりは、既に私たちの手の中にあるのです。

（JMS主幹・野村元久）